

楽しい鑑賞の授業をめざして

—子どもの学びが深まる発問と活動の手だての工夫—

音楽科研究会議

千葉 葉子¹

毛利 友紀²

松田 奈々恵³

小平 容子⁴

要 約

学習指導要領の改訂にあたり、中央教育審議会の答申（平成 20 年 1 月）の中で、音楽科の課題として「歌唱の活動に偏る傾向があり、表現の他の分野と鑑賞の学習が十分でない。」と提言された。この提言は、**鑑賞の授業に受け身な姿勢が見られる子どもの実態から抱いていた我々の課題と重なる部分があった。**

そこで、本研究会議では、子どもにとって楽しいと感じられる鑑賞の授業をめざし、音楽的な感受を育てることを課題とした。

楽曲にはそれぞれに魅力がある。その魅力が楽曲の面白さであり、子ども自らが**学び取る**内容である。本研究会議では、楽曲の魅力に迫る発問と活動の手だてを研究し、子ども自らが学びを深め、音楽のよさを感じ取ることができる楽しい鑑賞の授業を実践研究した。

実践から、楽曲の魅力に迫る教師の発問や活動の手だての工夫により、子どもが音楽を興味深く聴き、音楽を深く感じ取ろうとする姿が見られるようになった。そして、音楽を形づくっている要素などに気づくだけでなく、音楽に対する感性が豊かになり、音楽を愛好する心情をはぐくむことにつながることも期待される。鑑賞は、音楽の授業の中で大変重要な活動であり、様々な音楽活動に通ずるものであることを再認識した。

キーワード：発問 活動の手だて 音楽的な感受

目 次

I 主題設定の理由	62	4 研究の実際 検証授業 I	66
1 鑑賞の授業の現状から	62	(1) 授業の実際	66
2 音楽鑑賞教育の目標	62	(2) 授業の分析	68
3 楽しい鑑賞の授業をめざして	62	検証授業 II	70
II 研究の内容	63	(1) 授業の実際	70
1 研究の仮説	63	(2) 授業の分析	72
2 研究の構想	63	III 研究のまとめ	74
(1) 言語活動の充実とは	63	1 考察	74
(2) 発問の定義	64	(1) 楽しい鑑賞の授業のために	74
(3) 楽曲の魅力に迫る発問とは	64	(2) 鑑賞の授業における指導の着目点について	74
(4) 鑑賞の授業における学びとは	65	(3) 鑑賞の能力の見とりについて	75
3 授業の構想	66	2 今後の課題	75
(1) 授業展開と学びの深まり	66	(1) 子ども同士が高め合う共有の方法	75
(2) 検証の視点	66	(2) ワークシートの工夫	76

¹ 川崎市立王禅寺中央中学校教諭（長期研究員）

² 川崎市立末長小学校教諭（研究員）

³ 川崎市立大師中学校教諭（研究員）

⁴ 川崎市立宮前小学校教諭（研究員）

I 主題設定の理由

1 鑑賞の授業の現状から

これまでの私自身の鑑賞の授業では、子どもからの言動に、「今日は歌わないの?」「また聴くの?」という不満の声や「聴くだけで楽だよ」という授業に対する受け身な姿勢が往々にして見られることがあった。また、表現の授業に比べ、子どもの生きいきとした姿が見られず、子どもを惹きつけるような楽しい鑑賞の授業を実践できていないのが現状であった。

財団法人音楽鑑賞教育振興会は 2007 年に「学校における鑑賞指導に関するアンケート」を実施している。その中から次の事柄に注目した。児童向けの調査で、「音楽で好きなことは何ですか」の問いに対し、大半の児童は「音楽を聴くことが好き」と感じているが、「授業で聴いた音楽について、どんな場所で聴きたいですか?」の問いに対し、「教室でみんなと聴く」ことよりも「一人で聴く」ことが、年齢が上がるにつれ増えていることである。このアンケート結果は、子どもの個人指向を表しているものであり、学校での鑑賞の授業において、音楽を聴く楽しさを期待していない傾向を示していることが予想される。

学習指導要領の改訂にあたり、中央教育審議会の答申（平成 20 年 1 月）の中で、音楽科にはいくつかの課題が挙げられた。その一つに「歌唱の活動に偏る傾向があり、表現の他の分野と鑑賞の学習が十分でない」と示されている。これは、先に述べた自分の経験やアンケートの結果と同様、音楽のよさを深く感じ取ろうとする**楽しい鑑賞の授業が、十分に実践されていないこと**を表していると考えられる。

そこで、本研究会議では、音楽科の目標にもある「音楽に対する感性を育て、音楽のよさや美しさを感じ取ること」に直結する「鑑賞」の授業を改めて見直し、子どもにとって楽しいと感じられる「鑑賞」の授業の在り方を探ることにした。

2 音楽鑑賞教育の目標

渡邊學而の『子どもの可能性を引き出す音楽鑑賞の指導法』¹⁾では、学校における音楽鑑賞教育の目標について、「子どもたち一人ひとりが、音楽美を享受するためには、自分から進んで音楽を求めて聴こうとする態度、すなわち、音楽に対する能動的な態度が重要である。よって、音楽鑑賞教育の目標は、音楽により多くの興味・関心をもたせることである。その結果、多くの音楽体験をし、音楽美を享受する可能性が広がっていくことになる。」とある。

主観的な音楽鑑賞とは異なる、学校での音楽鑑賞教育の根本的な考えを理念として押さえていくことは、楽しい鑑賞の授業について研究するにあたり重要である。そして、どうすれば子どもが音楽に興味・関心をもち、能動的に音楽を鑑賞することができるのかを、渡邊學而の音楽鑑賞教育の目標を念頭に置いて研究を進めていきたいと考えた。

3 楽しい鑑賞の授業をめざして

ここでいう楽しさとは、楽曲本来の魅力に気づき、その曲の特徴やよさを味わい感じ取ることである。表層的で一時的な楽しさではなく、音楽的な学びの深まりを伴いながら、音楽を聴くことの喜びを意味している。目的意識をもって音楽を聴き、気づいたりわかったりするの先に音楽を鑑賞す

¹⁾ 渡邊學而『子どもの可能性を引き出す音楽鑑賞の指導法』（財）音楽鑑賞教育振興会 2004 年

る本当の楽しさがあると考え。本研究では、そのような「楽しさ」をめざしている。

鑑賞の授業において、音楽を形づくっている要素を聴き取り（知覚し）、音楽のイメージを膨らませ雰囲気を感じ取る（感受する）こと、すなわち音楽的な感受が、音楽的な学びにつながり、子どもがその学びを主体的に深めていくことが重要である。そのために、子どもが音楽を聴き取り、感じ取ったことを言葉などを通して共有したり、もう一度音楽を聴いて確かめたりすることで、子ども同士が互いに高め合うような楽しい鑑賞の授業を創造することが必要であろう。

表現の活動の中で「できること」が子どもの楽しさにつながるように、鑑賞の活動では音楽を通して「わかること」「わかったことを表出し共有すること」が鑑賞の本来の楽しさに結びつくであろうと考えている。子どもは音楽を聴くという行為は嫌いではない。それは、前述したアンケート結果や情報化社会におけるオーディオ機器の普及からも伺える。しかし、鑑賞の授業において、子どもは、何をどのように聴けばよいのか、そして、感じ取ったことをどのような言葉で表現すればよいのか、わからないのが現状のように思われる。

そこで、本研究会議では、教師が楽曲の魅力に迫る発問をすることで子どもの思考が刺激され、活動の手だてを工夫することで子どもの学びが深まり、楽しい鑑賞の授業につながると考えた。

これらの理由から研究主題を次のように設定した。

楽しい鑑賞の授業をめざして—子どもの学びを深める発問と活動の手だての工夫—

II 研究の内容

1 研究の仮説

主題設定の理由を受け、仮説を次のように設定した。

楽曲の魅力に迫る発問と活動の手だてを工夫することにより、音楽的な感受が深まり、学びのある楽しい鑑賞の授業になるであろう。

仮説をもとに、本研究会議では、発問と活動の手だてに焦点を当て、子どもが音楽を聴くことを楽しみ、音楽的な感受が深まる授業づくりについて研究を進めていく。

2 研究の構想

(1) 言語活動の充実とは

新学習指導要領の「B鑑賞」には、音楽科における言語活動の充実にかかわる内容について、小学校では「楽曲を聴いて想像したことや感じ取ったことを言葉で表すなどして、楽曲（楽曲の特徴）や演奏の楽しさ（演奏のよさ）に気付くこと（を理解すること）」、中学校では「音楽を形づくっている要素や構造と曲想とのかかわりを感じ取って聴き、（理解して聴き）言葉で説明するなどして、（根拠をもって批評するなどして）音楽のよさや美しさを味わうこと」とある。²⁾

鑑賞の授業での具体的な言語活動として、原田徹は次のように示している。³⁾

- ①音楽を用いて音楽のよさや美しさを生み出している様々な要素の働きについて説明する
- ②音楽によって喚起される自己のイメージや感情を比喩的な言葉で表す

²⁾ () 内は学年による記述の差異

³⁾ 原田 徹『中学校新学習指導要領の展開 音楽科編』 明治図書 2009年

③音楽によって表現したいイメージを伝え合ったり他者の意図に共感する

④音楽を聴いて根拠をもって自分なりに批評する

教師がこれら①～④の言語活動を促すことで、子どもは音楽から感じ取ったことを言葉で表出し、それを伝え合うことで自分の考えをより深めることができる。流れている音が時間とともに消えてしまう音楽学習の特性を考えると、子どもは楽曲の特徴やイメージを共感したり批評したりする言語活動により、音楽的な学びを深め、音楽を感じ取る幅を広げていくことになる。その学びの深まりを、子どもにとって楽しいと感じられる鑑賞の授業につなげるために、教師の発問や活動の手だてを工夫することが重要であると考えます。

(2) 発問の定義

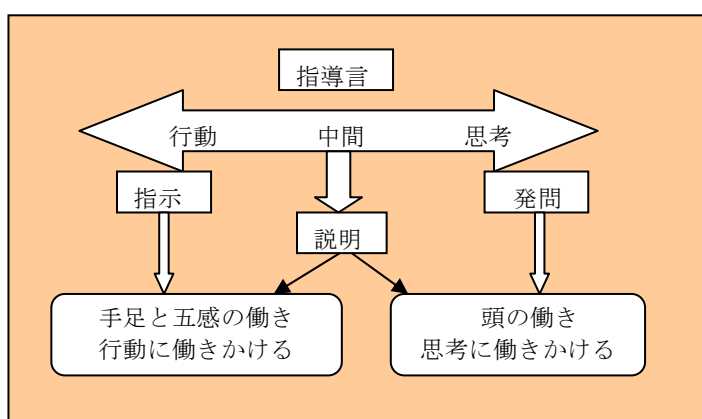


図1 指導言について

大西忠治の『発問上達法』³⁾では指導言について「教師が授業中に発する言葉を指導言といい、大きく指示・説明・発問に分けることができる。」とある。(図1)このように、教師がこの指示・説明・発問の三つに分類することで、授業が整理され、指示や説明を端的に行おうと心がけることが期待される。そして、教師が指導言を厳選することで子どもの活動の時間が確保され、発問を吟味することで子どもの思考が刺激

され、子どもの活動が充実することが考えられる。本研究は「音楽」という常に「音」が授業の中心にある教科であるということ、すなわち、言葉だけが前面に出る授業ではないということを確認した上で、研究を進めていく必要がある。だからこそ、授業の中で教師が発する指導言は、できるだけ少なく、吟味したものであるべきと考える。

音楽学習の狭義の発問は、「どちらの曲が好きですか?」「何の楽器が聴こえましたか?」など子どもから答えを求めるものにとらえられる傾向にあった。しかし、学習のねらいに迫るための視点をもって楽曲を聴く場面において、行動に働きかける「この曲のピアノ伴奏の音を聴いてみよう」という教師の指導言は、子どもはただ聴くだけではなく、聴きながら思考を働かせていることになる。よって、行動に働きかけるだけの「指示」とは区別をしたい。このように、本研究では、子どもの思考を刺激する教師の指導言を「発問」と定義し、鑑賞の授業において、子どもがより音楽を深く感じ取って聴き、音楽的な思考を高められるような発問の工夫をめざしたいと考える。

(3) 楽曲の魅力に迫る発問とは

本研究会議では、発問を工夫するために、教師が楽曲の面白さや魅力が何であるかを探ることが重要であると考えている。その上で、教師が授業で子どもに伝えたい内容、しかも子どもが理解できる内容に焦点を当て、楽曲の魅力に迫る発問を工夫することにした。楽曲の魅力に迫る発問をすることで、子どもが楽曲に対する興味・関心を高め、その曲を面白そうだと感じ、一生懸命聴くことにつながると期待できる。そして、その興味・関心は、もう一度聴いて確かめたりする子どもの音楽的な思考の高まりとなり、学びが深まるであろうと予想した。そして、その深まった学びを友達と共有したり書いたりすることで、子どもは思考を整理し、学びが定着するであろうと思われる。従って、教師

の発問は、ねらいへの窓口であり、ねらいに到達するまでの過程に子どもの**音楽的な学び**があると考えた。

(4) 鑑賞の授業における学びとは

新学習指導要領では共通事項が新設された。これは、表現および鑑賞の各活動の支えとなるものとして共通に指導する内容であり、音楽学習を深めていく手がかりとなるものである。学習指導要領の共通事項(1)のアでは、知覚・感受について、小学校では「音楽を形づくっている要素を聴き取り、それらの働きが生み出すよさや面白さ、美しさを感じ取ること」、中学校では「音楽を形づくっている要素や要素同士の関連を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じ取ること」とある。つまり、知覚とは、音楽を形づくっている要素、例えば速度・リズム・強弱などと要素同士の関連を聴き取ることであり、感受とは、楽曲の面白さや、そこから醸し出す雰囲気などを感じ取ることである。鑑賞の授業において、教師が楽曲の魅力に迫る発問をしたり、活動の手だてを工夫したりすることで、子どもはねらいに気づいて音楽を聴き取ったり感じ取ったりすることができるようになる。そして、聴き取ったり感じ取ったりしたことと、共通事項にある音楽を形づくっている要素を音楽的な根拠として結びつけることで、その内容を他者と共有することができる。この聴き取ったり感じ取ったりすること、すなわち知覚し感受することが音楽的な感受であり、音楽的な学びにつながる。

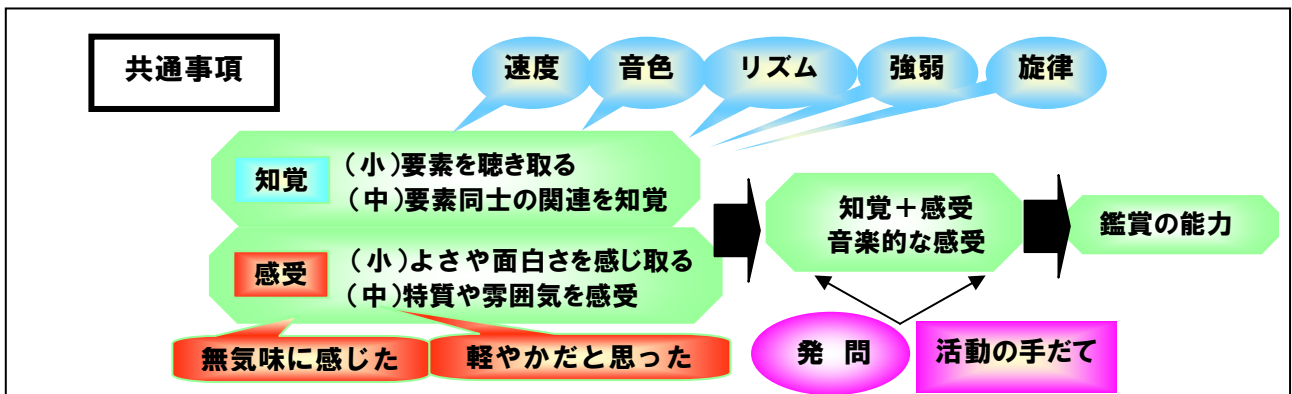


図2 鑑賞の授業における学び

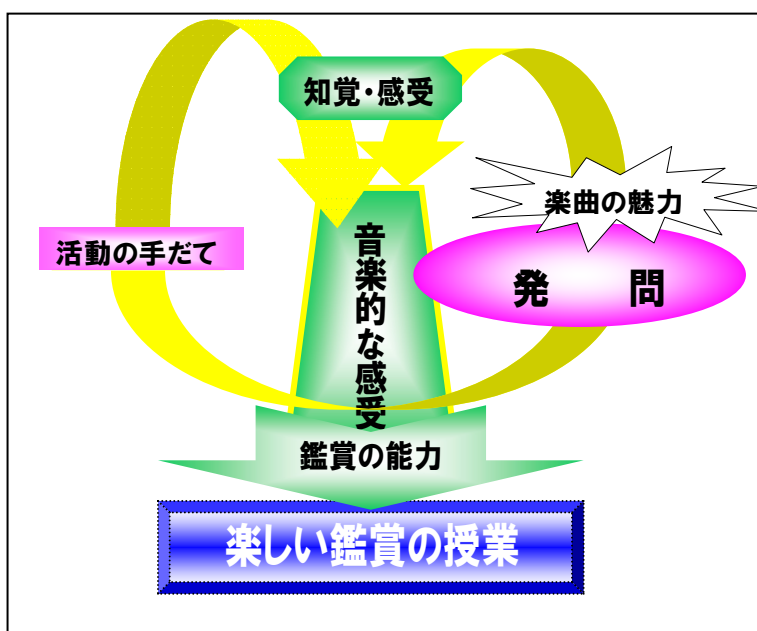


図3 研究の構想図

そして、図2に示したように、子どもの中で深まった音楽的な感受が、教師の発問や活動の手だてにより整理され、知覚・感受したことを自分の言葉で表出できるようになることが、鑑賞の能力を育てることにつながる考えた。鑑賞の能力を見とるためには、音楽的な感受を含めた音楽的な学びが、どう深まったかを段階的に見ていく必要がある。図3の研究の構想図に示したように、教師の発問と活動の手だてを工夫することで、音楽的な感受をいかに深めることができるかを研究の中心に位置づけ、楽しい鑑賞の授業をめざすこととした。

3 授業の構想

(1) 授業展開と学びの深まり

本研究会議では、楽しい鑑賞の授業を行うために、この楽曲の魅力は何かということを一に考え授業を実践した。魅力とはよさや美しさ、面白さである。そこで、授業展開を活動Ⅰ「楽曲の魅力に迫る動機付けになる活動」、活動Ⅱ「楽曲への興味・関心を高め、楽曲の魅力に迫る活動」、活動Ⅲ「楽曲から自分にとっての音楽的な価値を見いだす活動」とし、その活動に伴う**学びの深まり**を「ねらいに気づく」「音楽的な感受を深める」「鑑賞の能力を育てる」の3段階に分けて考えた。そして、学びが活動ⅠからⅡへ、ⅡからⅢへ段階的に深まっていくことを意識し授業展開を考えた。

(2) 検証の視点

楽曲の魅力から楽しい鑑賞の授業へ導くために、教師の発問と活動の手だてに焦点を当てた。活動Ⅰは活動Ⅱを充実させ、楽曲のねらいに近づけるための活動である。活動Ⅱでは、教師の発問によって子どもがいかに関心を持ち、活動の手だてによって楽曲の魅力を感じ取って聴いているかを検証の視点とした。活動Ⅲでは発問（ワークシートの設問）や活動の手だてによって、活動Ⅱで知覚・感受した音楽的な学びや自分の思いを、どのように表出できているか、また、活動Ⅱの学びの深まり方によって活動Ⅲの子どもの発言やワークシートの記述にどのような違いがあるかを検証した。

小学校では、この授業展開を題材の中の1時間で行なった。中学校では、この授業展開を2時間扱いで行なった。授業展開における学びの深まりと検証の視点を下の表1にまとめた。

表1 活動内容と検証の視点

展開	学びの深まり	活動内容	検証の視点
活動Ⅰ	ねらいに気づく	楽曲の魅力に迫る動機付けになる活動 授業の内容に楽しさを予感させる活動 授業のねらいへの橋渡しになるような活動	○活動の手だてによって子どもがねらいに近づく楽曲の魅力に気づいているか ⇒ 子どもの表情・発言から見とる
活動Ⅱ	音楽的な感受を深める	楽曲への興味・関心を高め、 楽曲の魅力に迫る活動	○発問によって子どもが楽曲に関心を持ち、一生懸命音楽を聴こうとしているか ○活動の手だてによって子どもが楽曲の魅力を感じ取って聴いているか ⇒ 子どもの表情・発言から見とる
活動Ⅲ	鑑賞の能力を育てる	楽曲から自分にとっての 音楽的な価値を見いだす活動	○発問(設問)や手だてによって楽曲から得た音楽的な学びや自分の思いを言葉で表しているか ⇒ 子どもの発言・ワークシートの記述から見とる

4 研究の実際

検証授業Ⅰ（音を聴きあって合わせよう 小学校4年生 11時間扱いの2時間目）

(1) 授業の実際

①題材目標・声や音が重なり合う響きを感じ取って聴いたり演奏したりする感性を育てる

- ・互いの声や音を聴きながら拍の流れに乗って演奏の仕方を工夫し表現する能力を高める

②授業展開の概要

- ・本時目標 2つの旋律の違いに気づき、音の重なりを感じ取って聴く
- ・楽曲の魅力 2つの旋律が重なったときの面白さや意外性
- ・共通事項 ア(ア) 音楽を特徴づけている要素 旋律・音の重なり
ア(イ) 音楽の仕組み 変化

表2 授業展開の概要

展開	学びの深まり	主な学習活動	具体的な検証の視点	教材
活動Ⅰ	ねらいに気づく	<ul style="list-style-type: none"> 前時に学習した「パレードホッホー」を歌い旋律の重なりを感じる 本時のねらいを知る 	<ul style="list-style-type: none"> ○パレードホッホーを互いの声を聴きながら歌うことによって子どもが旋律の重なりについて気づいている【知覚】 	ホドパレ ホッ
活動Ⅱ	音楽的な感受を深める	<ul style="list-style-type: none"> 「ファランドール」を聴き、何曲の曲からできているかを予想する 「王の行進」「馬のダンス」を聴く 「王の行進」グループと「馬のダンス」グループに分かれてそれぞれの曲に合わせて身体表現をする 全体を聴きながら、王と馬のカードを曲の進行表に貼り曲の構成を知る この曲の面白さや2つの旋律が重なったときの気持ちについて話し合う 	<ul style="list-style-type: none"> ○「いくつかの曲できているかな」という発問によって子どもが楽曲に関心を持ち、一生懸命音楽を聴こうとしているか【知覚】 ○身体表現・視覚的に曲の構成を知る活動・気持ちカードなどの手だてによって子どもが旋律の重なりや雰囲気を感じ取って聴いているか【知覚感受】 	王の行進 ファランドール 馬のダンス
活動Ⅲ	鑑賞の能力を育てる	<ul style="list-style-type: none"> 旋律の重なりから感じ取った情景や感想を言葉で表現する 音楽を再度鑑賞しながらワークシートを記入する 	<ul style="list-style-type: none"> ○「君たちがCD屋さんの店長だったらこの曲をどういうふうにアピールするかな？」という発問やおすすめの曲カードの提示・ワークシートの工夫などの手だてによって楽曲から得た音楽的な学びや自分の思いを言葉で表しているか【鑑賞の能力】 	ファラ ンドール

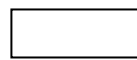
③ 具体の実践



教師の発問



活動の手だて



子どもの発言と反応

展開	学び	教師の発問と活動の手だて	子どもの発言と反応
活動Ⅱ	音楽的な感受を深める	<p>魅力 旋律の重なり</p> <p>発問A-① いくつかの曲できているかな？</p> <p>手だてA 身体表現で旋律の重なりを体感 自分が好きな曲を選び、それぞれの旋律が聴こえたら起立し2つのチームが向かい合う隊形で、「王の行進」は足踏み「馬のダンス」は手拍子する</p>	<ul style="list-style-type: none"> ●指を折りながら曲を数えている ●友達同士で目で合図をし、曲の変わり目を確認している ●複雑なところは困った表情 ●首をかしげながら聴いている【A-①】
		<p>発問A-② 最後ごちゃごちゃしたのはなぜ？</p> <p>手だてB 曲の構成表を完成させ視覚的に旋律の重なりを知る 王と馬のシールを子どもに配付し自分が担当した旋律が出てきたら曲の構成表に貼る</p>	<p>A</p> <ul style="list-style-type: none"> ●最初は自信のある表情で身体表現をするが段々迷いだす子どもが多い ●座りながら手拍子をする ●首をかしげながら動く 「どっち？」 「わかんないよ」【A-②】
		<p>発問B 聴き逃しているところがあるよ</p>	<p>「重なってた」</p> <ul style="list-style-type: none"> ●「そうか」という驚きの表情 ●わかって嬉しいそう【A-③】
		<p>発問C-① この曲の面白さってどんなところ？</p> <p>発問C-② 2つの旋律が重なった時のみんなの気持ちはどれに近かった？</p> <p>手立てC 気持ちカードを提示する 自分が曲を聴いて感じた気持ちを、言葉で表すために、具体的な気持ちを表現した言葉を掲示し、自分の気持ちに近い言葉をさがす</p>	<p>B</p> <p>「今どっち？」 「違うよ」</p> <ul style="list-style-type: none"> ●担当した子どもが聴き取れない時は周囲の子どもが「ほら今だよ」と教える ●自信がある表情で貼る子どもや、迷いながら後ろの子に後押しされて貼る子どもがいる【B-①】 <p>「何？」 「本当だ」 「王が重なる」「追いかけてっこだ」</p> <ul style="list-style-type: none"> ●必死に聴き取ろうとする ●気がついた時の嬉しそうな表情【B-②】
			<p>「2つの曲が重なるところ」 「馬が速くて、王がゆっくり」 「歌が・・旋律が交互に出てきた」【C-①】</p> <p>「盛り上がる」「重みがある」 「楽しい」「わくわく」「ドキドキ」 「爆発」「不思議」「びっくり」【C-②】</p>

活動 Ⅲ	鑑賞の 能力を 育てる	発問D 君たちがCD屋さんの店長だったらこの曲を どういうふうに応用するかな？	D ワークシートの記述 2つの曲でできているからワクワクしてきて とても面白いです。2つの曲が重なるときにとて もきれいな音になります。 「王の行進」は低い音が力強くなって本当に行進 してるみたいです。「馬のダンス」は馬がひずめ で踊ってるみたいに高くなるのでどちらも素敵 です。
		手だてD-① CD屋の店長のおすすめの曲書き方の提示 CD屋に実際にあるおすすめ曲に添えてあるカ ードを見せ、書き方の手順を視覚的に提示した	
		手だてD-② ワークシートの工夫 この曲の特徴を書く部分と感想や物語、情景を 書く部分を分けた形式にした	

(2) 授業の分析

「王の行進」と「馬のダンス」の2曲が合わさった「ファラドール」を教材とした。この検証授業では、楽曲の魅力を「旋律の重なり」と考えた。この魅力に迫る活動の手だてを工夫したことで、音楽的な感受が深まったか、知覚・感受したことを自分の言葉で表出できているかを分析した。

① 活動Ⅱ 音楽的な感受を深める

【Aの部分】ここでは本時のねらいである「旋律の重なり」を理解する部分である。始めから、この曲は2つの曲でできていることを知らせては、子どもが最初に曲を聴くときの発見や驚きが半減してしまう。子どもが興味・関心をもって楽曲を聴くために、発問A-①を投げかけた。子どもの中には、旋律の切れ目を1つの曲と数えていたものもいたが、耳を澄まし音楽の変化を聴き取ろうとしていた。また、明確な目的意識があることで、音楽を一生懸命に聴こうとする姿が子どもの反応A-①から見とることができた。音楽に苦手意識をもち、音楽の何を聴けばよいか分からない子どもにとって、発問A-①は有効であることがわかった。発問A-①の課題を解決するために、「旋律の重なり」を体感する活動の手だてAを行なった。「王の行進」チームと「馬のダンス」チームに分かれ、自分のチームの旋律が出てきたら身体表現をすることで、迷いながらも自分の旋律を聴き取ろうとする様子が子どもの反応A-②から見とることができた。この活動の手だてAを行うことで、発問A-②に対する答えが、自信をもって「重なった」という発言A-③の子どもの発言に結びつき、「旋律の重なり」を楽しみながら知覚できたことがわかる。

【Bの部分】Aの部分で知覚した「旋律の重なり」を曲の構成から視覚的に確認するために、活動の手だてBを行なった。子どもが迷いながらも旋律の重なりを聴き取ろうとしていることが子どもの反応B-①からわかる。ここでは2つの旋律の重なりを確認するだけでなく、同じ旋律が追いかける曲の細部に気づかせるために発問Bを投げかけた。この発問により、新たに具体的な課題を解決しようとしたり、その課題を聴き取ることができたことが子どもの反応や発言B-②からわかった。

このABの2つの手だては、どちらも子どもが音楽をよく聴かないとできない活動であることがポイントであった。子どもが自分の耳で聴き、確かめ、感じた上でこそできた活動である。受け身になりがちな鑑賞の授業が、能動的になり、曲を聴くことが楽しいと感じる様子が子どもの反応や発言から読み取れる。この2つの手だてを通して、「旋律の重なり」という音楽の学びを、聴き取ることによってつながったといえる。活動自体の楽しさだけでなく、鑑賞の授業を楽しんでいることが子どもの反応や発言から伝わった。

【Cの部分】「旋律の重なり」が十分に知覚できたことは、発問Cからの子どもの発言Cで確認することができた。次のステップである感受に結びつけるために、活動の手だてCを行なった。子どもたち

は一人一人音楽から何かを感じ取っている。しかし、自分の気持ちを言葉で表出できない子どもが多い。そこで、音楽を聴いたときに感じたであろう言葉を教師が予想し、「気持ちカード」として提示した。「楽しい」「わくわくする」「悲しい」などである。子どもは、そのカードを見ながら自分の気持ちはどれに近いのかを考え、そのカードをヒントにして、自分の気持ちにふさわしい言葉を探すことができた。この手だてがあったことで、自分の感じたことが整理され、またクラス全体で共有することにもつながった。この手だてが子どものワークシートの記述に影響を与えたことが、ワークシートDからわかった。

② 活動Ⅲ 鑑賞の能力を育てる

【Dの部分】 活動Ⅲの鑑賞の能力を育てるために、どうすれば子どもが聴き取り感じ取ったことを自分の言葉で表出できるかを分析・検証した。そこで、ワークシートの書き方の説明やワークシートの書式などの活動の手だてを変えることで子どものワークシートの記述を比較した。下記の表3のパターン①から④の比較は、「ねらいに気づく」活動Ⅰと「音楽的な感受を深める」活動Ⅱまでは、ほぼ同じ活動を行った。そして、「鑑賞の能力を育てる」活動Ⅲでは、全体に「CD屋さんの店長だったらこの曲をどういうふうにアピールするかな？」と発問した上で、4つのパターンで授業を行った結果である。このパターン①から④は全て別のクラスで行ったため、**単純に比較できない側面もあるが**、それぞれのパターンの中から傾向として多かった記述を例としている。

表3 鑑賞の能力を見とる設問と活動の手だての比較

設問と活動の手だて	パターン①	パターン②	パターン③	パターン④
ワークシートの設問	この曲の売りは？	この曲のおすすめは？ 曲が進むにつれて王と馬は・・	この曲のおすすめは？ 曲が進むにつれて・・・	この曲のおすすめは？
ワークシートの書式	項目を分けず大きなスペース	項目を分けず大きなスペース	項目を分けず大きなスペース	(a) この特徴は？ (b) 感想 or 物語
手だて 書き方の手順	提示なし	提示なし	おすすめの曲カードの書き方を提示	おすすめの曲カードの書き方を提示
手だて 視覚的な工夫	提示なし	気持ちカード提示	気持ちカード提示	気持ちカード提示
手だて 内容の説明	提示なし	提示なし	具体的なおすすめの曲カードの提示	提示なし
ワークシートの記述例	馬が明るく楽しくダンスをしているところ。馬と王が重なったところもいいです。	途中で王と馬が交互になって最後にはデュエットして、初めて聴いた不思議な曲になります。ケンカをして言い争った二人は仲良しになります。響き合いがかっこよくて勇ましいです。	(例1) 曲が進むにつれて盛り上がってきます。2つの曲が重なり合うところが増えます。王の行進は強くて馬のダンスは優しい感じでした。1つの歌が違う1つ1つの曲に聞こえます。多人数で聴くといいです。 (例2) 社交ダンスのときに使えそうな迫力があってうきうきする楽しいメロディです。聴いている自分もうきうきするし友達もわくわくうきうきがとまらないと思います。	(a) 王の行進と馬のダンスが交わっているところが特徴です。 (b) 馬のダンスは音が小さくてゆっくり踊っているみたいです。王の行進は迫力があって音が大きく王様が家から出るみたいです。王様が進んで家来ができるみたいです。王と馬がまざる所が王様が馬に乗る感じでした。最後は馬が集まる感じでした。王様が人と触れ合って馬と出会う感じでした。
特徴・傾向	旋律の重なりは知覚できているが、音楽にかかわる語彙も少なく広がりがない	気持ちカードで音楽にかかわる語彙が豊富になる。旋律の重なりを自分の言葉で表現し、自由な発想で楽しく書いている	手だてが多く子どもに書く材料をたくさん与えているがワークシートの書式が手順と異なり書き方が知覚(例1)・感受(例2)と偏っている	ワークシートの書式を書き方の手順と統一することで文章が整理されている

パターン①・②では、活動の手だてに気持ちカードを導入したことで、自分の気持ちに近い言葉を取り入れ、音楽にかかわる語彙が増える傾向があった。

パターン②では、物語を想像させるような設問をしたことで、子どもが想像したことを自由に書いている。しか、ただ考えもなく書いているわけではなく、ねらいである旋律の重なりを、自分なりの言葉で文章に織り込んでいることがわかる。これは、知覚・感受の活動で旋律の重なりをしっかり感じ取った結果であろう。

パターン③では、文章の書き方に具体性を見いだすために、CD店の店頭に表示されている店長のおすすめの曲カードを実際に読み、その書き方について提示した。その結果、旋律の重なりを聴き取り、自分なりの曲のイメージを豊かに感じ取る、知覚・感受の両方を網羅した書き方ができる子どももいれば、知覚だけ、感受だけと偏った文章を書く子どももいた。それは、書くための材料がたくさんあるにもかかわらず、ワークシートの形式が教師の提示の仕方と統一されていなかったことが原因であると考えられる。

パターン④では、教師が説明した書き方の提示とワークシートの形式を合わせ、子どもの思考が整理できるように工夫した。そうすることにより、子どもが何を書けばよいのかが明確になるだけでなく、教師が知覚・感受の両方とのかかわりを見とることが可能になり、鑑賞の能力を評価しやすいことが、パターン④のワークシートの記述からわかった。

検証授業Ⅱ（魔王の魅力を探そう 中学校1年生 2時間扱い）

（1）授業の実際

- ①題材目標
- ・音楽の諸要素が生み出す楽曲の雰囲気や曲想を感じ取る感性を高める
 - ・歌と伴奏から生まれる歌曲「魔王」の魅力を知り、そのよさを聴き深め、分析する能力を育てる
- ②授業展開の概要
- ・楽曲の魅力 怖さ・恐怖感
 - ・共通事項 ア 音楽を形づくっている要素 旋律・テクスチャ⁴⁾

表4 授業展開の概要

展開	学びの深まり	主な学習活動	具体的な検証の視点	時	教材
活動Ⅰ	ねらいに気づく	<ul style="list-style-type: none"> ・「魔王」の前奏を聴き曲のイメージをもつ ・「魔王」を鑑賞しストーリーを理解する 	○「魔王」の前奏部分を聴くことやストーリーを視覚的に提示することによって子どもが怖さなどの魅力に気づいているか 【感受】	1	魔王
活動Ⅱ	音楽的な感受を深める	<ul style="list-style-type: none"> ・音楽から怖いと感じる所を探す活動をする ・怖いと感じた役ごとに集まり、意見を共有する ・それぞれの役の怖さを発表し音楽で確認する 	○「この曲の怖さは音楽のどこに隠れているかな」という発問によって子どもが楽曲に関心を持ち、一生懸命音楽を聴こうとしているか 【感受】 ○ヒントカードの提示やグループ活動の手だてによって子どもが怖さなどの魅力を感じ取って聴いているか 【感受・知覚】	1	
		<ul style="list-style-type: none"> ・怖さ以外の「魔王」の魅力を考える 		2	
活動Ⅲ	鑑賞の能力を育てる	<ul style="list-style-type: none"> ・時代背景について学習する（シューベルトのDVDを見る） ・ゲーテについて知る ・楽曲を分析する手順で、音楽を鑑賞しながらワークシートを記入する 	○「魔王」の魅力からこの曲を分析しようというワークシートの設問や楽曲分析の方法の提示・時代背景の説明の工夫などの手だてによって楽曲から得た音楽的な学びや自分の思いを言葉で表しているか 【鑑賞の能力】	2	↓

⁴⁾ 和声を含む音と音とのかかわり合い

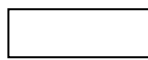
③ 具体の実践



教師の発問



活動の手だて



子どもの発言と反応

展開	学び	教師の発問と活動の手だて	子どもの発言と反応
活動Ⅰ	ねらいに気づく	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; display: inline-block;">魅力 怖さ</div>	A
		手だてA-① 前奏から怖さをイメージする 教室を暗くしてから、何も説明をせずに前奏部分のみを鑑賞し、楽曲の魅力である怖さをイメージする	「おー」「こえー」●すごいという表情 【A-①】
		手だてA-② ストーリーの続きを想像する 「子どもを抱きかかえたお父さんが家路を急いでいます。そ、そこに魔王が……」と書いた紙を提示し、ストーリーを想像する	「魔王？」 ●題名に興味をもち早く曲を聴きたそうな表情 【A-②】
		手だてA-③ 役ごとのカードを視覚的に提示する ストーリーを早く理解するため登場人物のカードを子どもが提示し誰の言葉かを確認する	●曲を聴きながら今誰が歌っているかを登場人物カードを見て確認している 【A-③】
活動Ⅱ	音楽的な感受を深める	発問B この曲の怖さ・恐怖感は音楽のどこに隠れているのかな？	ワークシートの記述 ・強く訴えかける感じが怖い ・お父さんと叫ぶ声が大きくて怖い ・ここで一気に音が強くなるから怖い ●○だけを記入し音楽的な理由は書いていない ●真剣に楽譜を目で追いながら聴いている
		手だてB ワークシートの工夫 ワークシートにある楽譜を見ながら曲を聴き、怖いと感じた部分に○をつけ、音楽的な理由を考える	
		手だてC-① グループで怖さの確認をする 自分が興味のある役ごとに集まり怖い部分を共有する	
		手だてC-② ヒントカードの提示 音楽の理由が分からない場合、役ごとにヒントを書いたカードを準備し、そのカードをヒントに怖さの理由をグループで考える 【ヒントカード】 子→お父さんと叫ぶ声が段々…… 魔王→始めは優しいが……	
		発問D 魔王の魅力は怖さだけかな？	
		手だてD 拡大ワークシートを提示 怖さ以外の魅力とその理由を楽曲分析の手順を整理しながらワークシートに記入する	「子と親のすれ違い」「やっぱり怖さ」「悲しさ」「(無気味な)優しさ」
活動Ⅲ	鑑賞の能力を育てる	手だてE-① シューベルトのDVDを鑑賞する シューベルトの生い立ちと時代背景を知る	●大変集中して見る ●魔王が作曲された場面になると表情が真剣になる 【E-①】
		発問E 魔王の魅力からこの曲を分析しよう	ワークシートの記述 (a) 怖さ (b) ピアノ伴奏の速さ (c) 音楽で魔王が子を捕まえようとしているのがよく分かり、子もそれを怖さでうまく音楽で伝えていて、想像ができやすかった 【E-②】
		手だてE-② ワークシートの工夫 知覚と感受を分けた形式にした (a) この曲の魅力 (b) その音楽的な理由 (c) 音楽評論家になったつもりで感じたことを書く	

(2) 授業の分析

中学校1年生で取り扱われることが多い「魔王」を教材とした。この教材は、楽曲自体に子どもを惹きつける要素が多く含まれているため、子どもは集中して鑑賞することができる。そこで、子どもを惹きつける要素は何か、この楽曲の魅力は何かを考えた。この検証授業では、楽曲を聴いてどう感じるかという特質や雰囲気である「怖さ・恐怖感」を楽曲の魅力と位置づけた。この魅力は、直接題材のねらいに結びつく内容ではないが、「怖さ」という特質や雰囲気の部分、いわゆる感受の部分のねらいへの窓口とし、旋律やテクスチュアのかかわりを知覚するという授業展開を行った。「魔王」の魅力「怖さ」に迫る発問と活動の手だてを工夫することで、子どもが楽曲に関心をもち、音楽を深く感じ取っているか、そして、感受・知覚したことが活動の手だてにより、自分の価値観で楽曲を味わうことにつながるかを分析した。

① 活動Ⅰ ねらいに気づく

【Aの部分】 「怖さ」という楽曲の雰囲気を醸し出す魅力が、子どもにとって唐突なイメージにならないように、教室を暗くして前奏部分のみを鑑賞する手だてA-①を行なった。この活動の手だてによって、子どもが曲に対して期待をし、怖そうな雰囲気を感じ取ったことが子どもの反応A-①からわかった。また、この手だてによって、ピアノの音に着目することになり、ねらいでもあるテクスチュアを意識することにつながった。これは、活動Ⅱの手だてC-①でグループ分けをする際、ピアノ伴奏の希望が多いことからわかった。できるだけ短い時間で子どもに怖さという雰囲気を予感させ、ストーリーを把握させるために手だてA-②③を行なった。これらの手だてにより、「怖さ」を前提に発問Bにつなげることができた。

② 活動Ⅱ 音楽的な感受を深める

【Bの部分】 「怖さがどこに隠れているのか？」という発問Bと手だてBにより、音楽に興味・関心をもって聴いていたことが、子どもの反応とワークシートの記述Bからわかった。楽譜をよむことができない子どもや、音楽的な理由がわからない子どもも、ワークシートの歌詞と音符の高低をヒントに、怖いと感じる部分を聴き取りながらワークシートにマルを付けていた。

【Cの部分】 知覚・感受したことを共有するために手だてC-①②を行なった。各自がワークシートに記述した内容を伝え合い、怖いという雰囲気に気がつかなかった子どもは、友人の意見を参考に記述していた。また、ヒントカードの導入で、活動への意欲がわき、怖いと感じる部分を探すことができた。子どもの反応Cからもわかるように、個人では活動が難しい子どもも楽曲に対して興味を示すことができた。グループでの活動後、クラス全体で怖いという雰囲気を感じた部分とその理由を音で聴くことで共有した。検証授業では、魔王・父・子・ピアノと4つの役割でグループ分けをしたが、鑑賞の焦点が広がってしまい、全体で共有する観点がぼやけてしまった。鑑賞の焦点を魔王とピアノ、子とピアノの2つにして話し合いをした方が、クラスの皆がわかるまで何度も音で確認することができ、音楽的な感受が深まったと考えられる。知覚・感受したことを共有するためにグループ活動を行なったが、子どもの個々の思いと共有後の思いの過程を見とるワークシートの手だてがなかったため、音楽的な感受を深め、鑑賞の能力を育てることに有効であったかは検証できなかった。

【Dの部分】 子どもが楽曲を分析する手順を知るために発問Dと手だてDを行なった。「怖さ」に着目して魔王の魅力を探してきたが、怖さ以外のこの曲の面白さを考えることで、この曲に対する価値観を広げることにつながったことがEで行なったワークシートの記述からわかる。また、子どもと同じワークシートが黒板に掲示してあることで、分析の手順を見通しながら活動することができた。

③ 活動Ⅲ 鑑賞の能力を育てる

〔Eの部分〕楽曲をより深く理解するために、作曲家シューベルトの生涯についてのDVDを鑑賞した。その中で、学習している楽曲と直接結びつく、シューベルトが「魔王」を作曲する場面にとっても興味を示していたことが子どもの反応Eからわかった。アニメーションだったこともあるが、短い時間で時代背景を知るには効果的であった。鑑賞の能力を見とるために、ワークシートの形式を工夫した。下記の表5のパターン①・②の比較は、「ねらいに気づく」活動Ⅰと「音楽的な感受を深める」活動Ⅱまでは、ほぼ同じ活動で行い、「鑑賞の能力を育てる」活動Ⅲを2つの授業パターンで行った結果である。このパターン①・②は別のクラスで行ったため、**単純に比較できない側面もあるが**、それぞれのパターンの中から傾向として多かった記述を例としてあげ、子どもの記述を比較した。

表5 鑑賞の能力を見とる設問と手だての比較

設問と活動の手だて	パターン①	パターン②
ワークシートの設問	魔王の魅力からこの曲を分析しよう	魔王の魅力からこの曲を分析しよう
ワークシートの書式	項目を分けず大きなスペース	(a) 魔王の魅力は？ (b) 音楽的な理由は？ (c) 音楽評論家になったつもりでこの曲を通してあなたが感じたことを記入しよう
活動の手だて 分析の手順	楽曲の魅力＋音楽的な理由＋感想	楽曲の魅力＋音楽的な理由＋感想
活動の手だて 視覚的な工夫	提示なし	子どもと同じワークシートを拡大して提示
活動の手だて 内容の説明	説明なし	音楽評論家になったつもりでという具体的な説明
ワークシートの記述例	メロディーはテンポが速いところが多くて強弱もすごかったので迫力がありました。魔王はささやいている部分がとても怖くてドキドキしました	(a) 物語 (b) 歌詞とピアノ伴奏と旋律 (c) 魔王の怖さもあるけど旋律とピアノ伴奏で子と魔王のストーリーが見えてくる。魔王のときの旋律の明るさがとても怖さを引き立てていることを感じた
特徴・傾向	「魔王」の魅力とその音楽的な理由、感想と全て入ってはいるが、曲のよさが伝わらない	設問が明確で分かりやすい。ただ項目(b)音楽的な理由が(c)の内容に混ざっているので自分なりの価値を見いだす内容が薄い

パターン①では、書き方の手順を視覚的にも提示しながら説明したが、何を書けばよいか分からない子どもや、書いてはいるが曲のよさを言葉で表現できない傾向があることがパターン①のワークシートからわかる。それは、分析の手順の内容とワークシートの書式が異なっていたことが理由として考えられる。また、自分たちの今までの活動が、楽曲を分析しているという意識が低かったこともあげられる。

パターン②ではパターン①での授業を参考にして、活動の手だてを工夫し、ワークシートの設問や書式を変更した。(a)楽曲の魅力、(b)音楽的な理由、(c)音楽評論家になったつもりで感想、と項目分けをしたことで、子どもの思考が整理され、文章が書きやすかったことがパターン②のワークシートからもわかる。

しかし、パターン①の記述からもわかるように、音楽的な理由がよく理解されていない子どもが多く見られた。これは共通事項にある音楽を形づくっている要素が分かっていないことが原因と考えられる。音楽を形づくっている要素については、表現や創作の授業なども含め、少しずつ積み上げていかなければならない。また、音楽評論家になったつもりで感想を書く部分に、中学校の学習内容として求められている自分にとっての価値観を見いだすことができた子どもは少ない傾向があった。パタ

ーン②のワークシートの記述では、魔王の魅力を「怖さ」ではなく、「物語」だと考えた子どもを例に挙げた。この他にも「悲しさ」や「一人4役」「優しさ」などを魅力に挙げている。「怖さ」を楽曲分析の一つの手がかりとして授業を展開してきたことで、他の魅力を見つけることにもつながったといえる。

Ⅲ 研究のまとめ

1 考察

(1) 楽しい鑑賞の授業のために

① 楽曲の魅力に迫る発問について

楽曲に対するとらえ方は人それぞれであり、楽曲の魅力をどう感じるかは聴き手の自由であるのかもしれない。音楽を主観的に聴いているときは、一つの楽曲の中でいくつもの魅力を感じ取る場合もあれば、一つも感じ取ることができない場合もある。しかし、教師が楽曲の魅力に迫る発問をすることで、子どもは何をポイントに聴けばよいかという楽曲の聴き方を知ることになり、音楽の学びにつながる事が明らかになった。子どもが、教師の発問から楽曲に興味をもち、繰り返し鑑賞することで、楽曲に対する理解が深まり、子どもにとって楽しいと感じられる鑑賞の授業に近づけることがわかった。

② 教師の発問と活動の手だてについて

教師の発問は、ねらいへの窓口であり、ねらいに到達するまでの過程に子どもの音楽的な学びがあることがわかった。発問をすることで子どもの思考が刺激され、すぐにねらいに到達する場合もあるが、さらに活動の手だてを工夫し加えることによって、子どもが迷ったり確かめたりすることを通して、より音楽的な学びが深まりやすいことがわかった。活動の手だての中で、身体表現や気持ちカードの提示、グループの活動などの音と子どもの思いを結びつけつる活動が、音楽を深く感じ取り、共有し、表出するための手だてとして有効であることがわかった。また、掲示物などの視覚的な提示は学年を問わず効果的であった。教師が言葉で説明しなくとも、子どもが視覚的に内容を理解することで、子どもの思考が刺激され、楽曲への関心を高め、ねらいへ導くことが確認できた。

教師の発問と活動の手だての二つを工夫することが、音楽的な感受を深めるために有効だということが検証できた。

③ 導入の重要性について

鑑賞の授業での導入部分の活動の手だてとして、検証授業から次の三つのことがわかった。一つ目は、鑑賞曲と同じねらいを別の活動で子どもが体感することである。本研究会議では、子どもが二部の合唱曲を歌ったり、鑑賞曲で扱う楽器とは違う楽器を聴いたり演奏したりすることでねらいに近づけた。二つ目は、掲示物などの視覚的な提示が子どもの思考を刺激し授業の楽しさを予感させること、三つ目は、鑑賞曲の一部を聴き、その曲のイメージを広げ楽曲の魅力に迫る動機づけにすることである。本研究会議では、音楽を知覚・感受する音楽的な感受を深める部分に焦点を当て研究を進めてきたが、授業の導入部分が、その先の授業展開に影響を与えることがわかり、改めて授業の導入部分の重要性を再確認した。

(2) 鑑賞の授業における指導の着目点について

2本の検証授業から、鑑賞の授業を知覚と感受のどちらに着目して授業を進めていくかを次のように図式化した。(図4) 検証授業Ⅰは、楽曲の魅力と授業のねらいがどちらも「旋律の重なり」の場合、音楽を形づくっている要素である「旋律の重なり」を聴き取り(知覚)、雰囲気やイメージを感じ取る(感受)、知覚から感受へ授業が進んでいる。検証授業Ⅱは、楽曲の魅力を雰囲気やイメージである「怖

さ」として先に位置づけ、そう感じた理由を音楽的な要素と結びつけて知覚する、感受から知覚へ授業が進んでいる。知覚する事項は、その楽曲の特徴の一つであり、客観的な視点としてクラス全員が共通に確認できる授業のねらいでもある。しかし、感受は主観的な内容であるため、ねらいに迫る一つの手がかりであることを認識した上で授業を進めていかなければならない。教師が楽曲を教材研究する際、知覚と感受のどちらからねらいに迫るかを確認することで、授業を整理することにつながるということがわかった。

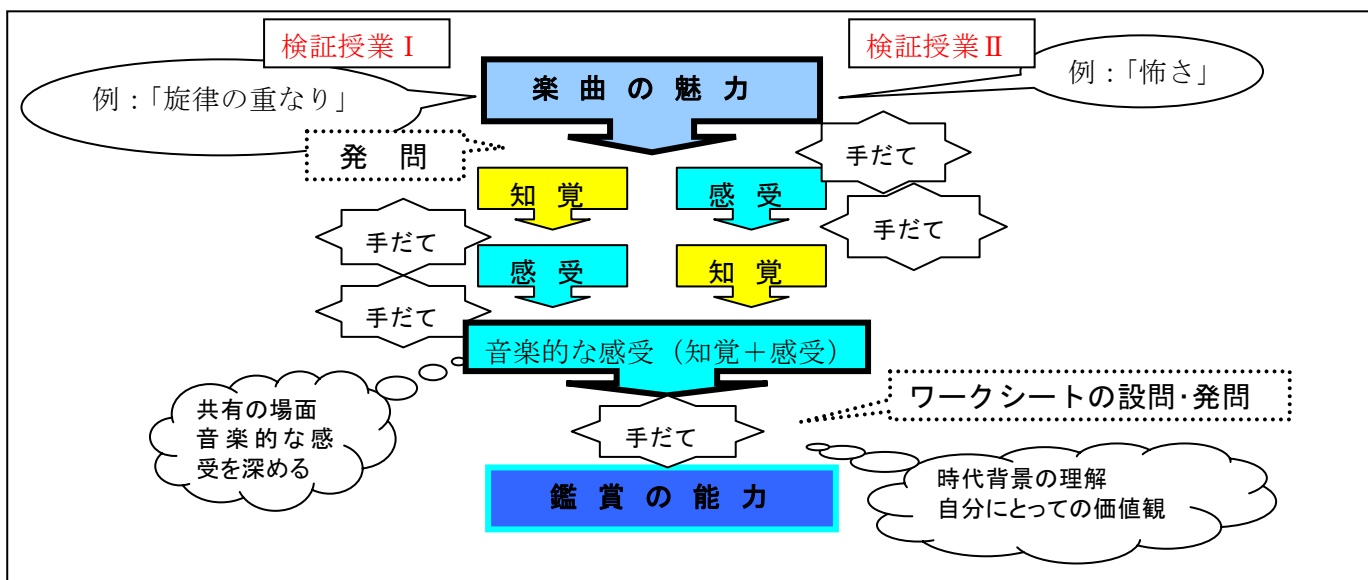


図4 鑑賞の授業の流れ

(3) 鑑賞の能力の見とりについて

本研究会議では、鑑賞の能力について、「音楽的なねらいを知覚・感受したことに関連づけ、自分の価値観をもって言葉で表出している」と位置づけ検証した。教師が子どもの鑑賞の能力を見とることは難しい場合がある。その理由の一つとして、授業のねらいが漠然としているため、子どもが何を聴き取り、何を感じ取っているかの教師の見とりが曖昧なことが挙げられる。よって、子どもが書いたワークシートの記述が何について書かれたものなのかが読み取りにくく、何をどう見とればよいのかが分かりにくいと考えられる。

楽曲から知覚・感受したことを子どもが自分の言葉で表出するためには、子どもが十分に楽曲の魅力を楽しむことが重要である。その上で、友達の感想を聞いたり自分の思いを話したりすることで、子どもの思考が整理され、言葉の表出につながる。そして、子どもが表出した内容を鑑賞の能力として見とるためには、知覚・感受を項目分けしたワークシートが望ましいことが確認できた。また、子どもが、最初に目的意識をもって楽曲を鑑賞した記述と、クラスやグループで共有したことでより深く楽曲を味わった後の記述を比較し、子どもの音楽的な感受の変容を見とるようにすることが重要だとわかった。

2 今後の課題

(1) 子ども同士が高め合う共有の方法

グループの活動において、友達の意見を聞いたり動きを見たりすることで、新しい気づき生まれ、楽曲について考えながら聴くことにつながった。ワークシートの記述や活動の様子から、音楽に苦手意識をもった子どもは周囲の影響を受け、思考しながら音楽を聴き、前向きに活動する傾向を見とることができた。一人で音楽を聴くのではなく、クラスや小グループで音楽を聴くことで、子どもは互いに刺激しあい、学びを深めていくと考えられる。

しかし、今回の検証授業でのグループの活動は、学びを共有するための活動の手だてとしては有効であったが、**より子ども同士が音楽的に高め合う**までには至らなかった。グループ活動が意見交換で終わらず、子ども同士が高め合うための教師の発問や活動の手だてについては、今後も検討が必要である。

(2) ワークシートの工夫

検証授業から、子どもの思考を整理するため知覚・感受を項目分けした書式のワークシートが効果的であることがわかった。また、今後は、発達の段階にあわせたワークシートの工夫も検討が必要である。例えば、発達の段階を小学校低学年・中学年・高学年、中学校1年、中学校2・3年の5段階に分け、ワークシートの書式を考えることも一案である。鑑賞の能力を徐々に育てるためには、学習指導要領に示されている鑑賞の目標を見据え、ワークシートの設問を具体的に考えていくことが必要であるように思う。最終的には、細かい項目に分けず、「この曲を紹介しよう」「この曲を分析しよう」という設問だけで、子どもが知覚し感受したことを自分なりの言葉で書くことができることが理想である。そして、考察の(3)にも述べたように、子どもが知覚したことや感受したことを、クラスやグループで共有することで、**子どもの音楽的な感受が**どのように変容していくかという、学びの過程を残すことができるようなワークシートが必要だと思われる。その際、ワークシートに書くことに時間を割き、音楽を聴く活動が疎かにならないように留意したい。鑑賞の授業で深めた音楽的な学びを表出するために、教師の発問とワークシートを含む活動の手だてについては、今後も検討していきたい。

最後に研究を進めるにあたり、ご指導、ご助言をくださいました講師の先生方、また校長先生を始め学校教職員の皆様に、心より感謝し厚くお礼申し上げます。

【参考文献】

- | | |
|---|-------|
| 大西忠治『発問上達法 授業づくり上達法』民衆社 | 1998年 |
| 小原光一『小学校音楽科新学習指導要領ガイドブックポイントと事例』教育芸術社 | 2008年 |
| 藤沢章彦『中学校音楽科新学習指導要領ガイドブックポイントと事例』教育芸術社 | 2008年 |
| 『音楽鑑賞の指導法再発見』財団法人音楽鑑賞教育振興会 | 2009年 |
| 渡邊学而『子どもの可能性を引き出す音楽鑑賞の指導法』財団法人音楽鑑賞教育振興会 | 2009年 |
| 萬 司「言語活動の充実」について『音楽鑑賞教育』4月号 財団法人音楽鑑賞教育振興会 | 2009年 |
| 吉田孝「言語活動の充実」について『音楽鑑賞教育』4月号 財団法人音楽鑑賞教育振興会 | 2009年 |
| 佐藤日呂志・坪能由紀子編著『小学校新学習指導要領の展開 音楽科編』明治図書 | 2009年 |
| 原田 徹『中学校新学習指導要領の展開 音楽科編』明治図書 | 2009年 |
| 深澤啓太郎 知覚と感受「音楽がわかる」ための指導として『音楽鑑賞教育』9月号
財団法人音楽鑑賞教育振興会 | 2009年 |
| 福井昭史 「感覚的な聴き方から分析的な聴き方へ」『音楽鑑賞教育』9月号
財団法人音楽鑑賞教育振興会 | 2009年 |

【指導助言者】

- | | |
|-----------------------------------|-------|
| 川崎市立稲田小学校教諭（音楽鑑賞教育振興会 鑑賞指導部会研究委員） | 徳田 崇 |
| 川崎市立小学校音楽教育研究会長（川崎市立末長小学校長） | 金子やちよ |
| 川崎市立中学校教育研究会音楽科部会長（川崎市立白鳥中学校長） | 伊藤 民子 |
| 川崎市総合教育センター指導主事 | 川崎 靖弘 |